「文」に寄せて

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長
大西 克也

今を通ると約35年余り、私が文学部の門を潜ったのは1983年4月のことでした。総合図書館の古めかしい閲を下ろし、書架から分厚く重い本を取り出して読む風景を思い出す。かつてこの本に触れた幾多の学びや先人たちとの繋がりを感じ、名状しきれない感慨が湧き出たことを思い出す。思はの頃から漢字と中国古代の文化に憧れを抱いてきた私にとって、文学部の「文」という字には格別な響きがありました。

「文」は、胸部に刺青（「文身」）を施した人間を象った象形文字でした。彼の意味はそこから大きく広がります。経済、政治、文学で書かれた文献、文献に記された思想内容、そして人間の文化的・精神的・社会的活動を象徴する文字となりました。文学部の学問は、どのような分野であれ、人間が長い歴史の中で繰り返してきた営み、現在も行われている営みを対象として、時空を俯瞰する立場から人と社会の根源を問うものです。その問いかけは、今ここにいる誰にも置き換えることのできないがかえのない「自己」が発するという意味において、いかに時空の離れた存在を対象としようとも臨場感と生々しさを持ち、同時に「自己」を広大な時空間に位置付けることで相対化することに繋がります。人間の普遍性と独自性を確認する作業であるとも言えるでしょう。人類が紡ぎだしてきた膨大な文献や蓄積された Uno を読み取り、新たな叡智を創造し、未来に継承して過去・現在・未来を繋げ架け橋となる、「文」はまさにそのシンボルなのです。

文学部には現在、明治10（1877）年の創立以来、増設と再編を経て27の専修課程（研究室）があります。研究室で行われている教育の中心は、先人たちによって培われてきた分野固有の技法を習得する訓練です。これらの研究室は、1963年以来半世紀以上に亘って思想系、歴史系、言語・文学系、行動・社会系の四つの学科（類）に大きく括られてきましたが、2016
年に人文学科一学科に統合されました。「人文」は中国の経典『周易』に出現があり、やがて人の文化的、社会的活動を象徴する言葉です。様々な分野を幅広く学ぶことで専門を相対化する視線を養い、深い専門的な見識とバランスの取れた知識から、私たちが自己の問題として直面する現代的諸課題に対応し得る力を養う教育体制を目指したのです。

昨今の人工知能の想像を絶する進歩は、あたかも人の存在基盤を揺るがすかのような受け止め方をされることがあります。しかし機械が人に近づけば近づくほど、これまで意識もしなかった違いが視野に入ってくるでしょう。人は「常に」未曽有の事態に直面し、いつしかそれを自らの知の体系に組み込んできました。文学部はこの先も変化する時代の動きを見据えながら、人の人たる所以を問い続けて行くことでしょう。

『老子』の中に「大音希声」という言葉があります。真理は微かな声で語られるのです。大きな声で自己主張ばかりしていては、本当の声は聞こえません。文献やデータと心静かに向か合う日々は、究極のコミュニケーションの訓練と言えるのではないでしょうか。文学部で過ごす2年間、過去と未来とに思索を廻らし、歴史の架け橋として今ここにいる自分の役割を、ともに静かに考えてみませんか。答えは見つからないかもしれませんが、